
春の吹雪

いづか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の吹雪

【Nコード】

N9794K

【作者名】

いずか

【あらすじ】

「書き続けることの意味を見つけないさい」

彼女は、そう言っていた。

「書き続けることに意味を見つけないさい」

そして最後に彼女は、そう言った。

はなびら

舞いおりる

はなびらみたいに

あなたとわたし

ひらひらと離れてく

あなたと寄り添い合うまでより

それはとても早くて

ひどく突然ね

「落ちるまでは花よ」

強がりとは思わないで

「また」を望まない

わたしのぞみ

「悪くない」

そんなあなたが

今も愛しい

いつもみたいに

まぶしいくらい笑って見せてよ？

背を向け歩きだす

わたしに見せない顔も

はなびら舞う季節

わたし達

ひらひら離れてく

枝から落ちたのは

わたしだけね

見送るあなたに見せたくないな

落ちた姿は

もう花じゃない

煙草と灰皿

その手の中から
こぼれ落ちる

わたし達の時間

「もう何本目？」

灰皿に押し付けよく笑う

「細くて長いのもアリだけど、太くて短いのも悪くないな」

最後の一本

まだ余ってる

こんな短い距離なのに

熱いそれは
あなたに届かない

こんな短い距離なのに

あなたは

わたしにふれようもしない

あなたを包み込めるような人になれるとは思ってない

わたしはただ

あなたを受け止められるだけでいい

こぼれたあなたを

残さず全部わたしが受け止めるから

細くてもいい

ながくなく…

繋がり

小さな画面

白をバックに

浮かび上がる文字たち

こんな簡単な繋がり切れずに

僕は毎日生きている

時間の流れと同じように

僕らの距離も

かわっていくのかな

君の愚痴や泣き言も

向かい合って聞かなくなった

文字で伝える笑顔なんて

僕にはないよ

ただ、笑い合える時間が欲しい

いつのまにか時間は流れ

僕は持てる力を使い果たした

変わっていったのは

気持ちでも

ふたりの距離でもなくて

減りつつける文字の数

声にしたら

君を変えられるのかな？

浅い期待も

放つ言葉は指先

不安定、背伸び

何も手につかない

何も起こらない日々

顔を伏せる君の仕草が

まだ思いを残した胸を切り裂く

どこか悲しそうに喜んだ横顔

花開いたような笑顔はどこへ？

風に舞う花びらのように

思いは不安定

忘れることが罪だったなら

この気持ちと

残酷なほどの事実を

どこへしまえばいい？

「強くないから」

逃げたくなるのは

見たくないのは

わがまま？

手の届かない所にあるから

余計に手を伸ばしてみたくなる

でも、掴んだそれが

どんなものでも

この厚い壁は壊せない

教科書の落書き

きみに貸した教科書から

甘い匂いが微かに香る

きみにしては丁寧に

すごく綺麗に返ってきた

わたしのものなのに

知らない色が混じってる

わたしにふれるその指先は

少し前までどこにいたの？

片寄りのないがった鉛筆

きみに限ってそれはないと思っても

ページをめくる証拠探し

折れ目のない

そこに潜むしたたかさ

知らない線がはしってる

表も裏も変わらない

でもどうして？

最近わたしに見せる仕草が変わってきた

見えない中身がもどかしい

知らないきみが

知らない所で笑ってる

泣き顔

ふたり無邪気に笑い合ってた頃は

まだこの気持ちは幼くて

君もそれに気づいてなかった

どっちが最初に口にした？

頬赤く染めた君は

同じような僕を見てたのかな

周りの目なんか

気にするより

僕を見て、頼って欲しかった

強がりはいいんだよ

細い肩震わす姿と

隠そうとし続けた涙顔

笑ってる君は好きだけど

泣き顔も綺麗だから

「誰よりも君が好き」

言葉にするのは簡単だね

口にするのが難しい

君の目から見える景色は

僕と違って

なにか、から伏せた君の視線に

言葉にする事さえできない

口にするのは

浅いため息と

名前を呼ぶ細い声

闇

変わらない
いつも通りの夜

浅い夢と君と暗闇の中で

僕らは薄い毛布を被り

寄り添う

いつも笑っているのは

僕だけで

君は俯き黙ったまま

白い世界の中でもがき

朝日の中で掴んだそれは

あの頃の君

手から消えていく

真っ暗な部屋から

そうやって声だけ覗かせて

君は笑う

冷たい笑い声は部屋中に響いて

僕は扉を閉めた

背を向けたくなるような現実

君はもう君じゃなくて

僕の光も闇に溶けてた

冷徹さから

したたかな狂気まで

僕は独り闇の中に残される

君はそれを見て

笑いながら頬を濡らしてる

晴れ空

天気予報は外れて

雲と共に去った雨風

晴れ渡る空の下

大きな水溜まり飛び越え

ふたりの距離がグッと縮む

ふたりですっと待ち続けていた

長い雨が止んで

晴れ空のあとの

綺麗な夕陽

見下ろす先には茜色の世界と伸びた影

ふわり波紋の中の歪まない想い

終わらない晴れ空と君の温度

風に流れる雲のようにふたりの距離は変わっていても

あれからずっと変わらない
水溜まりの世界

映し出すのは君の背中

伸びた手がそっと抱き寄せる

温かい世界の中の

ほんの一部

カレンダー

明日からは

もう新しいカレンダーだね

ふたりが出会ってもう3つめのそれは

お馴染みの記念日と想いをはせる約束でうまっていく

縦一列に並んだ「ハート」に

バラバラなふたり分の「お休み」

いつも一緒にいられないけれど

週末のイベントを待つ気持ち

「「同じだよね?」「」

明日からは

まだ白いカレンダー

1つめのイベントはもう決まってるよ

カレンダーにはない

ひとり、隠しながら準備してきた

きみの誕生日

無理矢理合わせたふたり分の「お休み」

眠る場所

冷たいベッド

ひとりには広すぎる大きさに

きみが寝ていた半分以上

恋しくなる

寒い夜は

ふたりくつついて

薄い毛布をお互い掛け合いながら眠りについた

暑い夜は

少しでも涼を求めて端に足を伸ばす

繋いだ片手は少し汗ばんで

きみの匂いは気づけばなくなって

枕も減らした

厚い毛布は重くのしかかり

熱を逃がさないだけ

暖かくて

大きくて

好きな匂いがする

わたしが潜んだ

心地良いあなたの腕の中

おでこに当たる

あなたの寝息は

今はもう静寂と

ひとり分の鼓動だけ

眠る場所（後書き）

ありがとう

ございました^^

春の吹雪

ずっと待ってたよ

こんな日がくるのを

あなたを見つけたあの日のような

暖かい晴れた日の午後

眩しい太陽と風で舞う桜吹雪

忘れないよ

あの日のこと

今朝のわがまま

「突然だ」ってきみは笑うけど

すぐに見せる困り顔

本当は少しくらい気づいてたんじゃない？

引きつる口元と光のない瞳

もう逢えることはないのかな

適当な愛想笑いが挨拶になるくらいの関係

どうしても埋められない温度差が頬赤く染める

声にならないお別れと

結んだ口からこぼれる泣き声は同じ

慰めなんていらないよ

突き放して

もう笑うのをやめて

瞳が合うのは一瞬でも

想いが胸に残るのは永遠

悲しくても

はかなくても

ずっと吹き続ける春の吹雪の中

「忘れないで」

きみへお願い

春の吹雪（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9794k/>

春の吹雪

2010年10月11日05時17分発行